



2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7

集義外書卷十三

窮理中

361
8

一朋友向貴老言簡不專人の姓名をもれ一語字もすまへ何とぞ
かんやうてひだり 云今名も悪や否も死後まで下生度より是の
言ふのをもとてうるさく圖るべしやするどもそゆれば人情惟危ゆ
えよとすらかの生涯よ人の怨名とすよもも下生度改て善よ
うりあへてすまへ 甚とえまあるものまほきをひき生る人よ
あそひ有け人情とまも生まよのまほあそびつら他のそつらうる
ねどりかの年と道傳のあうる若竹のたゞとくに人を含めて傳とばれ
あそびに後事とてはまくの音とてゆはす書寫よ附書とのやうとまく

實傳すと後世は誰よりも有りへば都も高世のそとよも承
へてかく是れ此處を主とすと云ふ事は未だ所の傳とは別に傳の所也
太常の名の傳を以て是れが事あらむ——古傳の人の名をもあらぬ
猶も——今より多くて多し所也——然しが傳のことを見れば太常の名稱を以て
人の名成りをすらゆる事も多し所也——然しがと人の所と云ふ事は未だ
他の名をもあらざりてはむかしの相手の姓と傳する人と云ふ事の名をもひむ
改めて名前を入すと福かし傳を以てらまきと云ふ事やすてあらうと
あると云ふ事の人がする仁愛の事を云ふ事もあらうと
改めまくらすと云ふ事と云ふ事で八傳よりもうれきして改じるの歎

一朋友同貴老心病を人馬病をオ代えさせし事方を承伏の時は
人のよ病せが病を口病を今も内かどもあやうが病く病なるもあてが是
尼やうなやうなすすめをせむや —— 痘をすしの道で財布のふ
着哉つアとてりもきくる事す人馬病をもあよもひに寄す病
の箇ハ財所も空うたゞらめしらめに自力の分とちうてしるべにて
まもる知りともあらうから人馬病りをもあまのものとぞう
疾ふ親を承りてりは軍人の肉をくほす城より傳の軍船を阿リモ
もと改めて内面とけめらじてあらういはくい男めども玉器の内もあま
あらう内もあらう代え意か——もあはうがうくい男めども玉器の内もあま
ねづかく代絶人をもあらうがうく何方よあサヤアシヤ又傳者——

一朋友向うをあたひ在あり乍らもとや事もうちゆうけふをとあま人と
ちゆゆのゆかへて手の清女も直よぬ道へ走せりよス也
あきくくまことゆ
義人云左近のゆ事もよしむれゆる所を先人
の翁はま成りゆる所を先人伊賀の山の塔成

所代長久を大名も家老も生れんのかよ。かくいふやうの事すと
きりうつゆても何もあらず。やまと重人をそよも足踏字うな人のより
えあへて御内智を生れんや。御内智をそよも足踏字うな人のより
めせぬよ。仁政もにこりて後妻よある。あもひ。

一朋友向うけよ。萬葉とや。山利太郎とや。日傭の者の物を

いや。若云日傭の者は使てうきとくをねうへ。あくと山利川

の堤を今千あそや。やうとや。大面や。日傭のうそやうのものを
日傭とはお面や。まく。反日傭。か。先と並ねむはく。上
入ね。一万人入をよ。卒たとえ。又入らぬや。とく。被掠よ。及ひ。得

かくのは日傭ひへと公義とは。千あく。千金。やう。信二の御旗
のうち。とく。又。又。日傭様も仕ひ。も。ほのえや。そく。率の純
まりと。お月を逃ぐ。と。百四。と。内。か。と。死。高店の子や。あらうの高
木はえ。木。か。日傭。二千。千。あ。の。も。安。役。主。方。の。堤。は。万。寺
入。千。金。寺。の。古。千。金。も。入。ぬ。と。永。代。破。壊。か。く。い。一旦。ち。か。あ。入。の。や。う。
山。門。の。地。理。も。人の。た。う。や。う。の。功。る。ぬ。り。と。左。手。純。す。と。翠。葉。を。覆。ふ。
ま。手。の。ゆ。も。こ。ま。地。取。し。と。金。と。翠。葉。を。覆。ふ。の。者。は。え。づ。に。ぬ。も。翠。葉。よ
が。づ。く。る。の。ゆ。堤。の。翠。葉。を。集。め。と。今。附。地。役。家。か。の。山。役。か。と。や。と。山。役。を。

をもと功者らに度々アモテ堤豊國ナニシの日備ハ日と義と義方と名シ
やうやくもくらみニヨリ外事清もくらみを有すが如きは也
そはるを刻ム。堤の壁面がくる中アモテヨリ堤
モニ御も有る事モト一からくい池の根すらとはことと云ひ有
あてとも生あてと云ふ池の木筋も此あとのよ被災の爲也
告嘆の跡ゆる矣。ちやの方のどうかと云ふ事もあま
ねゆきもちやの山川の地にも金銀玉穀の宝物も
皆町人の手のとどき仕事する仕事は町人ともまことに有
るかとぞ金銀皆町人のもとあつたり才智町人も一時貢
達のたるもくわしくあり乍ら初歩もあらざり城のまゝかすこゑある
ゆくは皆うけり初歩もあらざり城のまゝかすこゑある
きふとくゆけり。うれしきの生むる。久しくゆきの
あらむ社のゆきもくゆくぬむ却くもくゆきの
ちの内すくとくゆくぬむ却くもくゆくぬむ却くもく
ト却くもくゆくぬむ却くもくゆくぬむ却くもく
八代うちも早急にうやうきのまわらづねりすそは高のやまを
まほよ實も時々賣有すのとぞを知る所也。子とキムモサヒ
藏もよろみて才力成る所のとぞを知る所也。才士のとぞを知る所也。

卷之三

1

一朋友向天文之學也。因與之言。天事之空虛也。

云む一 前漢のあゝあゝ日月あてもときは明代かわづと事たり是
よりく四時の氣ふゆやへて五更也大々一 客星もて帝坐となり
あるす有早のひうちをもむらむるもの有り時の質も二承をもすと
云日月のえの靈元のきをよねされ客星のあゝあのかどもの位の位
あがんとも畢まほの位えのたゞもあらぬ、君の位どうとも志有り
人ううううと王莽う代とれしの勢あきぬ時の賢高よくて云王莽也
すよおよ成うさんとも漢家のかきくちのた名あり何そ義士と
かして莽と協せりや貢者があつては隋弱をふとも上手にせり
帶々惡逆成めうきて其れを云也莽上の左右はあざとよゆてら取引
し漢の五原も永の大名うらも天下の主もそのあつづんとかまは天下
の漢をつくをさのタ一 云一 あくべ事一 が一 奉うめび逆歟と
物あくもとすれどもはち家の敵もハ却て惡逆と謂て天下の敵とぞ
そくへゆくももあら、あらうた大名と云うことをかまうと、かまうと
の人知りはおぬれことぞれあつて莽より
莽は天下と云ひん。 云上の事はひよりておも奉れそまくと
あらうは附り奉れうとするものあくや漢家の五強とあはは國間はを
ともテ下ニテとて取れてまくと莽よをきらもとゆけかて莽天子と

兵をばつこせりかく一至便多て莽々奪ひあらうと莽々漢家より至る
まつてある凡人節」¹ 重んじてもたれつぬもの、角の社よりて多くと
孤の虎の威をさうして石山よりて神威の有す城主と曰ふれど、莽々
まで人の弓をうするをかくはんとめとして威をねまつて、莽々と達のんぢてと
威をもつて松風を奪ひそんとめとして威をねまつて、危うくとも毛をすら
まくわざとくすくまきうるまくはんとめをして、毛をすらゆるねのねとめ
まくわざとくすくまきうるまくはんとめをして、毛をすらゆるねのねとめ
のよなせまくはんとめをして、毛をすらゆるねのねとめをして、毛をすらゆるねのねとめ
威をねまつて、易いにはもあらず、毛をすらゆるねのねとめをして、毛をすらゆるねのねとめ
度せよあらむとほむとて、毛をすらゆるねのねとめをして、毛をすらゆるねのねとめ
度や又手に慧眼をひきつけられ、天下をもとて、毛をすらゆるねのねとめ
ちんと毛をすら漢の世の法をきく。二百竹葉の天下をもとて、毛をすらゆるねのねとめ
お漢の天地の勢しけども、天下をもとて、毛をすらゆるねのねとめ
政をもと毛をすらぞのを今あるをもとて、天下をもとて、毛をすらゆるねのねとめ
れで、わらみ成陣て新をもとて、毛をすらゆるねとめをして、天下をも
とて、毛をすらゆるねとめをして、毛をすらゆるねとめをして、毛をすらゆるねのねと
毛をすらゆるねとめをして、毛をすらゆるねとめをして、毛をすらゆるねのねと
あくえん毛政をもとて、毛をすらゆるねとめをして、毛をすらゆるねと
初とす又二百竹葉治

ひくをとてはまくすすりや西風あらはすかほ
の川のそとを走り川原に伊の春よの川をも御宿の川
あらはすの東ひが範例ありまことしの何ときのめのはあらはすも有
まゆまゆせせすやそのゆうへ何とぞうりりもや宿ふの處ゆうすもゆ

島し夏高周の三代の事の川河りんとく川も満くをもつてあります
天トタリヘモリカヘテ落葉山渓の源流とよびて古法と用
故し今のもとて山門のまづりとれまへ西本ノ松平年用ニ左坂井清秀
の川口のを河取る事ナリト向うか水との合と後夜トて
草木城もよしもよもようも入キ多御いなきすまや 云山と
ちありて多々又見たれどもち角の處と今何物と云は
お進み入て川水ゆくゆく勢といふあとがさうます大なるがすも一卷
ゆもあすは無く

一或向今の大瀬川と二ナの原の上うち川ちナヘテ有るの佐保の川筋人
ササヤ一内肉沙と號てはの内口(おとせは能と申す)沒有もすはる
夏立ひ重間タヘテ根の出はる差又カツカツモ也
さあくかと總そはけくわをあつましらひはるかとおもひ
本より一人川立ちと申ゆのあらうほのえびすそめの主有り人川の
拂ねるよをもあらうてあるとえても早も拾石せばおきをかひりとを立
沙へあして何日がはま(あせ)大和は地盤も一 溝内(の底)はまじの
只そとをあらあらむかへて一 はまきほ今の大石あともくも
ゆうそりうねねうそのはらはまけも下積ちくとてうーのとよもとすく
ねもんと水と水すくへ一 島の附はぬの十石あともくも
あのがもひのむかへ一 島の附はぬのと西砂石とつとてあらのむかへ
は門あまはすくもとたるの附はぬかへ一 カクまの川も缺丁有り

二河直轄も有る事よりひがひを、城堤のあやう見りゆゑにし今のはれど
堤友山と曰ひありやまも水かくとも有邊率も日備のうみもむすぶ
堤の度を既あらも此二十里沖の到院あるま里半里余に港あまやす。
やうはつゝあんて既はすら、あきとむろのがむづくのうみもむすぶ
千里余の西川のも或町なるふとくち和河内之上田島と西毛と
山とあまとあまとまゆめとねくへきなやまく御門とお河とまゆめ
あまは後は大和の國のもの有す。かの門は四箇所とつとも應
すてぬまほは仰す。あくまく新月とせせらはもるものも有す。
をれぞ大水の海の水勢力とあれば、よせぞしてい中くわくらととかてうて川の
長さの信はれは川たばはを水とまとうからままで水をき
ざく水はくさくくい是上流とも下大坂までのあ階かてうて川の
川をも本筋川とまうなほ、一絶流をす。ねち和河内の南のす
うち大坂のすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくす
やくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
さうりのすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくすとくす
大和の内和泉紀伊紀土佐の地形をうむしむ。大和門とてうの
口有りとくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさとく
アシナガの砂やとくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさとく
アシナガの砂やとくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさとく
アシナガの砂やとくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさとく
アシナガの砂やとくさとくさとくさとくさとくさとくさとくさとく
湖水の色を本水として用ひて此三十四万石能水底のぬれ勢界の

下をうねの岩とあらきは水底で絶はへるやうに是とどうぞおまかせ
ゆやむし 云ふは思ひずやあらん湖のこゝとすら一般の處はあらず
あら湖、あら自然の處の處あるよもくの處を切ては湖の色よし而
は川の水をさと湖の水をさとあればは川あるゆき今のかの處はも下
被事よりと事多め事ぬ——海とすと甲斐有り——湖のわと
アの川へを年の地底よ地とありて前後もすとすとすとすとすと
木をさと水をさと地をさとては大地底とゆきもすとすとすとすと
白銀の色井へと今と水すとすとすとすとすとすとすとすとすと
をあて伊毛付清川の水と結縁とけりうそきうちれとれとれとれと
の方(地名のうその處)とれとれとれとれとれとれとれとれと
有て山川の地理と見角りとえくと曰山川の事——がく——がく——
主後山川は既あるより成りて——先のきよのくちよのよ——にけま
と聞るむなく生身の写用も深き處を本ともなまじ古人の間ま
考もなく高人すと利よ——ものもあまくつりあらんぢやうもくと
あまく砂石河あらび——あらび——あらび——あらび——あらび
砂石河——あらび——あらび——あらび——あらび——あらび——あらび
沙の彼岸とあらび——あらび——あらび——あらび——あらび——あらび
沙の彼岸とあらび——あらび——あらび——あらび——あらび——あらび

又び門ちくよよりて轍もよ新川えそくうとやう有是もせあらうま
事ふじ日幸もようとすまう事多あゆうとち和河内の向とふ萬を
川よはぬ一てモヤよ新川よ萬人よとたがるもじ轍よもせよ
アバ川下よ新川よすまは川よの花あくねもむ一うりと有もは
さぬとくそひりま一て轍よほぬ一て新川よもよと赤の段蓋によ
てまよよと轍は轍てちのじくせんとあともやまとよなたよとみかせき
の行力よものあれあそ一九うとももや和河内のよ向よ永代すり
てぬがおなまく一て轍後世よが一轍一正とよ下の新川よもよ
轍よくよねまよめくよひる

一或向河内玉方の山川のよ向よ度深とぞ多の因ゆすまよ是とある
川よ所よと一見る新川よほおと難波の海一かく一伊勢に三方石
やとの古地たうと新川よはぬ一田地うま万石半千しけ儀い
云宮本本ほの門ちくよとくわゆうあまを万石まで三万石とゆハ利
人の能波と考きは度深とゆとゆもとて古地も年少よりのすやう
知人や一也一毛よとくとて矣のくやくはせとひ一け度深の田
地とくくよと度深とゆとて一に有人のらとせとて利の本お城事とせれ
度と新川の呪言は當たくにい度目の度もまよとひ
一或向河内玉方の車とまをせまくとて音合せよ初度よとひ
やうりて山家水もとしよ出處よき精道あくや 云の活あらう

集義外書卷十四

窮理下

一朋友向佛法と生國の天皇はソラノテテ彌陀をもひこし
ある者ともう佛荀よゆて言ふやあも
そく日ゆよもさすあらゆる所そでぬ御見前事あつまひと通せ
高貴極うきゆうぬ跡うき御道の法と經
祖迦達磨の無從もくの事いや僧人の死もくは至用の事とゆく今
やうもうてか千年の内ゆくにち裏かめく佛荀左まはて失せ
百年の内ゆくにち方を廻り——ね十年の弓の矢の事ゆくともも内の卦世は
えくくうておもてすくらんのちまくよひくあくとおもておもてあく

貴老の作より名づけた法を起りては即ち身のこころに
畜生心と佛法長久である。天地より凡ても生れん死ん
する道の法起りては佛法中身せん事口傳へ
す有りての事無くとも有る。くわゆても有ることいふ病焉
もし食の事やと生むと死むと生んと死んと病焉
あんたは終りてありてからくも佛焉ともも
れ世うす百利立冉ようある。貴くは是を大なる憂患うらぐ佛焉ともも
す。六衆が付く邊のまじめうねとうて百利立冉も幻焉また事なれ
きはがく。佛焉とももく。西僧すくへゆく。義の心もかく
ありもあくして日中の事あり。乞ぬうとやめや。被

一朋友同治する事の事の思達の事。なまぞ丸せよねもあくわゆも
あら書ああまよ。何ぞや。云其體多とくとも日中の事の毫百本
以氣治すがき氣治すもくじに大綱とあり。至一は敵のらひき
其二うな走て仁政とあひ。易とて佛焉の得失の法と生て。事信
寺多達る。其よはことのまこととあき。其事は。魏晋の人と。儒の
事多ゆゑ。殊てふひも。と。仁政と。と。其事は。かくうきて。信政と
竹ひかひぬ人の事。うな走て。あくの事。かくうきて。信政と
じ早と見天下の裏側より多く。えも利害と。わちと。あひ。されば。と。即
政道と。と。ほたてあり。す。モ。義と。利と。死と。義と。苦悶と。ものと。

多利多利多利多財、尼居文子の間も多ハ利のまゝとて喜樂主就
亡ぬきく、氣亂する事無き也。先人處の私心にて參て仁義を失ふ
とき多也。報積もたるか否も不仁の事はあら。まるでよし。猶可也
多きはトとある外也。貨物てのものは又情てのものに必死なれ、
多く氣乱する事無き也。天性して天よりの裏微と云ふ人有
もアキテ天より裏微もす。そののあもじをあつたまき。モニヨウ其
の法を生て。聖寺多建あり。アリトトク前車の覆ひ後車の戒め
眼前の事より遠てあらや。向くいと代々佛法。アシケルがむの法を
アシケル事は多し。傍よからず難有ゆ。而て制ゆ。アシケル事
多ひ。其の本氣もそろそろキニキナナ。聖寺を建立して中身と
ノミキ新寺湧きて。向ふとちかの名とし。アリヤ。西聖長老とめて。上り
ケドモ。法事とて。今早も。と。五日も。と。五日も。と。五日も。と。五日も。
而法も。かくも。取と。事よ。後せよ。東かく。と。聖寺年内。よ。多ナリ。汝
多日。事半も。少。多。も。也。汝。多。事。多。也。汝。多。事。多。也。汝。多。事。多。也。
猶。多。事。多。也。汝。多。事。多。也。汝。多。事。多。也。汝。多。事。多。也。汝。多。事。多。也。
古。神。多。事。多。也。松。柏。の。鹿。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。
多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。
多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。柏。多。事。多。也。

あへる堂寺、成るやうえ日印の事は多達ありて、何の記すも
を記僧法師の所あし 同じ一のが ま法師あるもことと
居すまゆる。記事よりれ法と庵をあらむりそようとも早朝
あすはあててもかく独坐とすとよつて居る。云まふても齋と
知るの尼、人力と天孫のねのびと先はくぬものせのゆの文を
小ゆるる。なぞもあらむるその佛龕はれてハ根ぬ廻りなまは
うとをあて根はくまゆる独坐ぬ。一やめて清らの法をくらく
あ象をあへる堂寺、成すをやハギトモ、三十年まで死せとするもの百本も
のをばらす。中も天を下りたまゆて山ゆく跡ぢう。昂ひゆき
出よ山跡事わらす有つてもあよ生むるものはその山跡の力よけひ
て生むる理し天子大爾公象大名士農工高公君は、有してきの間
一其用のけんを祀る。吾等もいぬきは其をうはそき
はよ人有今象の堂寺ハ本像と一りあてて二事。キモ
人モヤシぬきとくとて吉敷方丈庫裏をとててもかよ。豈
かと遠くへやらあひハ前後此つて或と達す。一日印あ申
よ。毎年寺をえらべて、寺のありあらわすとみずとを、
もとの脇て計(ヤ)てよろす。一ノ年は五年前年、
二ノ年の事は五年後年と弱くても山の内へあらわすとみずとを、
もみとておれしそくたゞくまえ度由来のかよだをもすの
まよだをもすの被れぬふらうゆふて後世の法事はよめきて寺も

又如某トハ山林の力はすと川もあらずならぬにてせりありて
傳え平治の世のとてきつてありて清豊寺の僧と魏立と大至
大統とヒ公家よりびたるを改家よりくとほんとて或平家平と
後又源平の乱世分多めれ公家三代よりやまとみの初とてハサウル乱世
の名稱とて本の用ひや自ゆまほに川も深くかくぬ少系の奉時時
やまとキモヒケリヨウ一ももあや川も深くかくぬ少系の奉時時
れ傳とねて源平と一也あよて九代と傳とまもと治世
久一にて堂寺年よりうそと山門の神氣スチナリぬりてせの
中主がとあきと平元の乱をみて事アタマ一因セモヒヨリ川
次山林の源平公家ノ利害代はきて天下の無長一章ちをも
山門の力まではキトと東山殿の時のものとて信構なる必ず紀の内々の
今ニ歟アとあく歟とて天代の跡アとてまくひとその後天代をみて天下
我く勢みて公家ノ名ゆうとて信長やて天家の乱セ久一けら
山門の源平の威勢とゆるかひ一十二三年あくと秀吉公と
十年の内信もの威勢とゆるかひ一山門の源平十四代二百四
所をもとめのとて川くわのとくゆくゆくも天のふ縁十四代二百四
より今まくとて天のふ縁十四代二百四所をもとめのとて川くわのとく
鑿知能とて伟石の景がとて天のふ縁十四代二百四所をもと
えむし一のやうなる天のふ縁魏立とて天のふ縁

朋友向佛局の跡すゆか聖中御世とあとよへりて佛局がよこをふ
るの事ゆゑくとすよちの災害とあひゆけりや云天子と
多し水きうるわぬよ清と涅槃と神ゆの彼無必徳と左脛
有とあると誠利のむよやあらまことある事もとすれものとモと佛者ハ
多かしとあらむのせの段乃のあらまことにを佛局も跡と称
するをとせらの跡すゆの半かして七、佛局もわざとつまむをとひよ
他の風俗とも被りぬまほ半身只ひの形たるが故よ母子と母女とよ
童子もやも僧もまたひととくもあきとはゆくちりりやし川のあきよはくまの

法輪が成却されぬめりあきて、世中へあらわすの所をもばく天地のやゆで
附すてもなまきは常除の事よりて死世とぬき天下をもばく死世とぬ
きぬけのゆゑとも名あるものたりきは死世とぬきの他にありばつとも
あとのみかやのぬううこのゆゑと生むる紙が見面すのゆゑと聖
賢の傳の事あるを考下み而まこと年もばくちよ早起と下ひ空腹の
まづりとぞのせと連て代て侍る事と天の巣山とあらむ早起と下ひ空腹の
とて森川口の神氣にまづわらひんとて、るをひきとくの
事事ともゆゑあ、相撲のたのゆうする悪人を出家せば足利義政代のう
意にれのやうなることをかくす

一朋友向五代の佛者の中
此初は東寺の圓融と多武峯を諱す山号の大名寺
の門の門前をまどよ宿のもの居たる——さて今も百石とも一
云む——とすとあらまよやうに、岳の上に御多喜の山の
町を在ぼしとひやうとすうちもかくいひの山号せても
坊主は敵山であるといふと、此初の者法のの敵山と敵山のものは皆
もとものふ姓若きをすくべ場主いかに今も町の士をあらわすと
ちの百姓とゆすべくと立蓋のことをよじくの寺もいふう新

卓教玉たまどらを藏山へ寺役減りあと見れりの山林ちねうて入あひて
も町立家は建候する段百方の寺も一とう傍くらうて今も院長の寺居
のとて生家よりて入て侍り御行とても多とておとてあり所とて是地の
山林三十十九寺内とてもかと南島とてぬ——寺ゆどうとてもよし
あゆももゆのえすよ十倍仕くいねむり——の仏者とてもよし
酒者とてりをそうふ今のお分ものでりひ甚す今うちまわとばその
はえりとてもよし

同書の跡て山林とてもよし

玉はあひて禁中公家の御化もあり祐よをくともかやとて今ハ王下の
政臣もあゆは言ひ言ひ人をて山林とてもよしれ業の法とて執りとてやと
ゆだりとては業とて風流より業とて業事より武家の御化と高きを
竹は今の如なあす——かくもと本奥(さ)と處をとむ——今やうは
育む——がめや巻きとてあきはもとくとておほの者とてよしとて海
うとくとて今あす——き業より高ひる所はうとてくとてくとてくとて
けうとくとて何事とてかくもとてけうとくとてくとてくとてくとて
無相の業とておもとてせぐとておもとておもとておもとておもとて
はおえつともおもとておもとておもとておもとておもとておもとて
禁中并公家元とて高ひる所とておもとておもとておもとておもとて
おもとておもとておもとておもとておもとておもとておもとておもとて
業のやくとておもとておもとておもとておもとておもとておもとておもとて
御年金とておもとておもとておもとておもとておもとておもとておもとて

あまえと申すと仰ておもひを大矢を射て燒き肉と大矢を
弓の矢をうちとすらはりて焼き肉をのみあわしく御と歎く上手に燒死
ゆるるに死する所の時、いへりて中をうきよつてはははははははははははははは
是の費もあなると。士庶翁がわの弱妻ねあへぬと申す事の傷害
今を申す時、さかもうそまはてあまいたとふくらむを御せすとやも
仰へ。貴き汝はよの仰ておまきとも其時御せり仕のゆゑに生まうと
信頼せぬを身一代をやとなむとおまの代てまえよぬと百姓をなむと
因處アリ。而後は其のむかうぬほゆまく町と富てもゆけ
わとのものは、仰ておまきともおまく聞にあら十石の車とて、とわを
大方わとうあるこまくやかの室をまはん儀よりの仰ておまきともおまく
そまは千分の一そひ山城の吉澤甲斐外もうつとよともふと年年以年の
太小をとおまくと。一年のまの修理建主内おまくとて三千石目づ、
入出だしもあまづて、奇ハ一年もあまく合て一千石目とまき同
じくおおはいあとあたまをあてて、すく間で而御まの在席の仰ておまき
すれとはおまく千石目とまきとて、今三三すまき河原より達りつゝも
金一千石目、八百石目、三百石目、三十石目、三十石目、三十石目、三十石目
古の數は五萬石目、三十石目、三十石目、三十石目、三十石目、三十石目、三十石目
ちよ又千石目は、八年のまきとおまくはけたすりとおまくはおまくはおまくは
ゆきとおまくは一年のまきの用まく二十石の士庶翁が室をまかん

三年三月もよ御前より申さるをうち天下の町人百姓のまゝの家
残り候修理アリ右もほりまじに有候もとてやい是處の物を費の多く
ヨリ此のまことに年々ムラ千年間左をかうトシ日中のものもあらずとも
五年もの内よりソトと裏側仕事すらも莫れの費用が有るのせば
なまくのりかうしてはかりあると云ふ事一火をそんとえまむと
仙者の算算アリ一括て七時計を利支丹の御算鑒をめぐ
佛事の着石ヤ一又ナラ度傍外く寺を建てくとね君臣とも
信者忠臣まで有るだけの事蹟の所とありくらうて世中の
はくくまきはくくむ一太過人を我の信ありて佛法再興の法をえ
事と承ひ上書一又あくまく書よしむり五百年げくある者と
生はうたごと忠臣知人を取どく

一朋友同書同信のありとは何トモと申してゆくと云ふ
云先事事と申すと故て後時も戒と仰一五時と申て死人歿とてぬ
ハキ五時と申すと云敷と人能と云うて斗争と申まうと云はば
きくと人能と云仰人や政事も善の所作ありは戒と云ふ事より
うすく承り

一朋友同書一又同代もよあひ天下の信職もアリと申へ万事
安守りモトセイ一又大忍皆アリと勤もはりと爲めりと云ふ事
云道にありとて翁と紳の居る人相仰おほが國勢もとて安守り
あらゆのやどりも思ひ入らひかま事の所よりも大よ能ひゆる所

ものとて四方の事多あらずゆきもまよとぞ見るをちのと
おけよ二人を助とす有るのよは軍陣とも右將軍よ副將軍
ゆゑひ助とておれども軍陣とも急援自成足りぬとて大將
そと被さるゆゑよぢうちかたるにあれば死のとせのゆえ助けのゆゑ
副將軍がくとておれ今の多ひ難頭のくとてのゆゑのゆゑ又へ助けのゆゑ
因よるべくかせり一悪くする所あつてとあればゆえとまよの
おれさまあわきて後悔えそのゆゑあへんとまよのあへゆゑとまよは
そくゆゑとまよ二人とて三人とて理當なれ
一或同人のおれさまのとて我お能とおあらとあらとほんと
あるお分合せば見えし方三分一からうへ用意せしゆゑ
まよにあらあきとおれもあらゆきゆゑづく 云はく
人のよきとよきのよきとよきのよきとよきのよきと
ハナセキのよきとよきのよきとよきのよきとよきのよきと
ニコニヨリはくとモシオ利根をじ耶とゆきのちくとあら
たくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
を事のよきとよきとよきとよきのよきとよきとよきと
たよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
あらとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
まよひとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと
とよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきとよきと

第一の位田卿。今の役目にて助とまゐる。而はもと
人を氣取へ事へてすくなく勧めりと勵むる事もあつて。助も
かく儀へたるが多うやう。事へたまき。人を氣取へ事へ
人を氣取へ事へたる事も加へては役人よりは有上位の人もあ
有氣よせりて有氣と云ふ。而も以て空船の事をうへ多すと云ふ。
ねまはありまつてある。空船をまきはまうりわら。さまほどと在船の事
知らぞや。——後まで衆風熱くい。佛は本の作成すまはまうもゆき
おとめまわは國歌もありひまつた。そのもやうもゆき。よ水代と
も。——天道と云一時の事も。——おまえの生を收めら
ざるうこ

一 奉公の勢よりとがまうる高岡と曰今その代友と代お猿へ
防府に官初めり。名前アラサト。姓トシキ。重てす。後てちかだるや
多よひ。善と云を歎へ。——所知六をましも根もくへ相傳がまし
今その代官を代められぬ。ふ素用と半敵と人。約束しぬら
思えぬ。もや相まひの。よほんじ代友と代お猿へ。——くらる
約束の。大あくべく。中よほんじ。事とまつて。政事とまづねの。先
仰す。前くべく。中よほんじ。人の中よほんじと。書
をひ初う。本敵の。よほんじ。人の中よほんじと。書
をひ初う。本敵の。よほんじ。人の中よほんじと。書
札きり。——モ底ハ清く。——う波の。と。跡と。あとは人よほんじと。書

首尾に至るに用ひたまことにあらねば、故にゆゑに無事のうえとまことに、かくて
妄想をうながすには、考へては成らぬから、ひそかに妄想を修め、
欲の波をうなげぬまゝのまゝを、また用達——事じは而され代友
ゆふ仕事も有り、いわく、初めう事と清潔とある人、とよきぬるより一旦
があつた清らぬことを、あらかじめよそおひ事と内にうけ、御室を育むべし
の誠、生三日あらずとまゝは、たゞいとくも、月を経て月をもつて

一朋友向奇

極く必人道の古法と云ふ事も
云ふ人の道のすゝみ軍事の遺風とて治世の神である必治世の神
てゆふ宣伝をもさむトシテ御付するものは生まつた天爵をもゆ
平士士とよよのがんやましの御名也
東岳の御名ちより「まつり」とて、并農工商の子すらのノリ
ちうりあきはるゝ事の上に刀とて、刀とて、刀とて、刀とて
ちくらゆせなへて是れとて剣をもとあらゆる軍中のがと車とま
用ひゆる、武者久くもんに平生の形と軍中と用ひゆる故陣と國
ありとひ今も軍中の形とまこととあるものよしと治世の風俗をもん
そきそも武の實のへりとてまことにともとらりや、武の實の實
のきうちとほのじたとばけつておの多は——西岳ちうりのうとの
附の車とよほのじたとばけつておの多は——西岳ちうりのうとの
もととやくぬとて辭め因み方所やとひて、け肩を跨立の風俗あくとゆりや
とひて、け肩を跨立の風俗あくとゆりやとひて、け肩を跨立の
よしとけくとて、け肩を跨立の風俗あくとゆりやとひて、け肩を跨立の
よしとけくとて、け肩を跨立の風俗あくとゆりやとひて、け肩を跨立の
一朋友向今時つらつらと夢網をとぞくねりや、神事の事をや
や、云神事の事わざと、夢網をとぞくねりや、神事の事をや

右方の事へはもあればひやと多番紙と本番はいふて
蜀あともあら者ゝも蜀有 同する人にはそりの蜀の事
有る一也と人を教へまちく印すてくとゆる事へうきと
ゆきと 云誓紙ときをそうかとゆる事はおもとてもうきと
用ふき紙とよむるにこころとゆる事はおもとてもうきと
二三をみてハたとみのとて今まくはおもとてもうきと
此處はゆくとては居たるがわくとまきはおもとてもうきと
の用(さへ)とておもとてもうきとまきはおもとてもうきと
是上人唐せ魯のとてもおもとてもうきとまきはおもとてもうきと
トカシキは墨紙のかへとおもとてもうきとまきはおもとてもうきと
ニテ是を別義をなまは汝へ おもとてもうきとまきは神
をなまのやうとねばへやめおもとてもうきとまきは紙物をもつて
香とゆへ おもとてもうきとまきは八萬へとおもとてもうきと
あくまじ記まきは墨紙をもつて おもとてもうきとまきは神
の御名を墨紙をもつておもとてもうきとまきは神を祀るをもつて
おもとてもうきとまきは神と慢やれぬとおもとてもうきとまきは神の御名をもつて
神の御名をもつておもとてもうきとまきは神を祀るをもつて
おもとてもうきとまきは神の御名をもつておもとてもうきとまきは神

なまくてけりあひゆへてやのとてありんとあはれとつまきかきへ雲
御手すらすら人よよ強はは奥加けらももの聖御をては事アヒテ
まもがれまよがれ事は聖御とうとあよぬをまわいし今ま
ちやうよく聖御やとあ」とてはやれ人力のあはれとて聖御
人力の力ぬ事は圣めで御事よがれまちのを思ふ付神よ
かくちゆきあらせまのまひ神文とゆゆると義りて、武士の名
まづねから

一朋友向徳のは度より法比も即ちのものと
云今之分まで度あるとあらば南の日暮のものと
多處を民間へりてゆる處よゆきかのほどをたゞめりしと
男おまふと能アマサ事成あひむぢよひみか
もくわくよせあやつゝとかばははとせよ牆に妻と柱にモ仰人よ
雲をもて絹糸の多生むる所よは因年わよあよそむのうとくのう
ゆきやさく葉のと風ふ麗風おうふと用城ケリ約二千石也
政とくとたうとと圓すよ生じておし

モノの能ニ氣便の草木々——原野山川を知る事も叶ふる也陽
多モおもとまくうきく火氣の神ニ祀け奉り自體よりを祀る比
ノテ御事——心地よしもくまく有り——主體とすて事の内と
アリ——今より後の人もとほもかづき居つて我あらゆる事——達得
の事は否多々有り佛面を主に五經の法を弘めの事と有り
ナリ——先日卯井一の佛面を重傳を子の代より承る事も有
リまく佛布申納を歎する申ねて日蓮家より是る事と有り
佛伝をすとあとがくなくしての内因外名は禪まで——是の日
氣極までれど——圓融もさへやも豪申もすむか——是皆て四
の相を引きと我の心は佛者までなむて故人也——佛法の罪と云ふ
庵くわむ人やもむまん人のほひもはづきの心の罪つもあひてあら
まをああくややくの佛徳信る人——神道者り儒もつねアリ
タは圓必たるる縁契ふれま————有才之く佛道と云ひて
わざの人にまく年少はあひてあらるる佛者とて皆くはばの罪をもあら
や又儒者とてちぢる人もあると云移易の修業をしてゆく文殊がまは
泰のあひてこそ通すありて身もまき所ありて是處えどりまく
將——と福とたれるとの傳仰をあれり跡立てある者り申納を歎く
法華や——かみの力足を犯ゆる人びておなじうきわとの力量をあまは
禍もあらむと福と將するやうも

一朋友同日外執植

時代を今ま事多き

ゆき少子もすと侍候金を出でてはまやくはまのはまのとてへ食うやうも
生——スミ内へ告号あきら國多のわがりと時もよめり——
くじらんや えむ——執植の人は差金とて福を待つて待つて
きと待つてきとんとちよ圓天のまゝ用ひへば執植の人と織も君
とくはあまは御うやうとやうめし節目時代とては誰もも君者是人
とああらじゆきと身代りの福をい 向福はるゆのまゝ
事へたるや 云賢者も主財を拂へるまかうとてあはれとて福を傳へま
んやううぬ強とも一代の福をゆふよまうと傳所する多あらも
手附のまもとまくまほ福あらうとてはよ五福ハあらや一丸もと
すくまひや地うちのたまがまは圓あらふよめうとて主財ハ一代の福
付くる福とまうましくもあ節も苦福ともく福とておりとも直參
のまめ—— お節よはるうものそくちくに執植の人のまきよも増
而あわ—— なれ方福ハ主財ゆふもんをくねくねくねくねくねく
四面をくくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
路あわのまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

一朋友同日年は兵動とやあくら度と無く或の兵動ハ大うれれて走
うきじく名系永也と名氣ても付とうもう人もか—— やる兵系永也あ
卫て名系人とて古事のせよ甚系永ソウチ—— らめとあきぬゆく
氏あらへ今名もとまくまく文也か—— そぞ兵系永也とゆ

筋もナビ者ら家々をとえまうとよ大男よなる也。穿孔傳のものも効を佐
とくは紀の代の歴くもゆくにて機と熟と其若の事。——是よりてや
まりからせ申日とよ多數の又多數の力の人とすも筋目浦を石原にふる
まゆつぬ事。人波才知波才をもてと守護を車とを參むの事。と
かしてさうよ生あつる者と云ひて守護を車とを參む。——是より
か因の前の方も有り。こう前と今よういふとすも事と傳へて
や。——此不有ゆ人の段とどもて是の士太將との歴くの事すとて
少姓あともはそなうとあうとの下知は御殿と云ひて千方よ思ひも
理じんうの徳もと焉ゆ。——人ゆきを者と附むとれまのものも
を取とてとて御殿と云ひておらを有あし能く徳よ化。——
ちくとものし

一朋友向公家と肩衣袴の伝承する(支引のよあ次第内に衣冠ならばそ
のありともね衣とてありきかのへぢよことより人仰りをね御よぬひハ
ソと云けかよきて仰きと今のおびそべぬゆきの位田織田とすれ
有てゆの左位うるとみての対はあくまほね衣とておぞとて先そすがねよぬとも
宣ひてぬ衣ありまほくらをまほぬ衣とておぞとて先そすがねよぬとも
仰華花の内二河二河翁りひぬ河を三えをめとてね衣とておぞともとくらひ
西月の万國うあくまほよおおぞまほぬ衣とておぞともとくらひぬ
——事と云ひてぬは因みすまぬ——あきとも今の風俗の申すく

久アテシ物もそて有レ今之のあはれを想ひあ間へ輿也ハ
荀め汝よ景亭殿若リトモシル事よしを有致リテウチハ
向後或ナの首の形ニモ序。——也當小刀軍陣のさ刃も今之のあはてハ成
サキ事人作人や　玄中と今之分ニハ如キ——かに老者とや
あやまつて今之風俗のよきを傳付リモ邪魔人ま悪あ仕合種人若く
ま孤もモ有り候ハトツカヌキモ行リテ職業トハ何事もナムリモ
ウタハ空氣よやひ人道の利害トコトハアシマリテ甚也付うハ必タ
ゆてハナム及理を反そニハゆくもナリ

集義外書卷十四終

